

日本における博物館の 地域活動の今と未来

～活動を通じた「変化」に着目して～

阿部 麟太郎

北海道大学 文学院 人文学専攻

博物館学研究室



未来社会のあるべきかたち

- ◆ 博物館を「一人一人が変われる場」に
- ◆ 博物館を「地域と対話する場」に
- ◆ 博物館と地域住民とをよりよいパートナーに

そもそも、「博物館学」とは？

- ・広義の「博物館」＝「有形及び無形の遺産を研究、収集、保存、解釈、展示する、社会のための非営利の常設機関」
→ 一般的な「博物館」のみならず、美術館・動物園・水族館・植物園等も含む
- ・博物館学＝組織づくり・マネジメント、展示手法、価値創造など多角的な視点から博物館の未来について探求する学問分野

現状と課題

- ・「博物館」の存在意義・役割の変化：
博物館法の改正(2022)：「地域の多様な主体との連携・協力による文化観光その他の活動（まちづくり、福祉分野における取組、地元の産業の振興、国際交流等）に
取り組むことで地域の活力の向上に寄与」
- ・「地域アイデンティティ」の重要性：
博物館と地域との関係を論じるうえで、「地域アイデンティティを確立する」「地域住民の自分探し」といったことは繰り返し述べられてきた
→「なぜ？」が明らかになっていない！自明の理？その意義は言語化できるはず

問いと研究目的・調査手法

- 博士研究：「博物館活動を通じて地域アイデンティティと向き合うプロセスは、地域住民・博物館側および地域社会をどのように変化させ、どのような効果をもたらすのか」
↓
研究論文1：その前段階として、先行研究・博物館の活動報告計516件から、日本の博物館と地域に関する現状・課題を整理＋どのような視点が重要であるかを調査

明らかになった3つの「変化」

地域住民の変化

事例：大東市歴史民俗資料館

「住民参加型」の特別展
「みんなで見る！知る！楽しむ！野崎のまち」
準備期間中、「発見カード」を市民から公募し展示の中心とすることで展示を「市民が気づきを共有する場」とした
↓
「〇〇のお店だったら、私なら違うのを紹介するなあ。」
「ここって毎日通るのに、こんなのあったっけ？」
「博物館は勉強する所だと思ってたけど、楽しいわ。」
「帰り、ちょっと遠回りしてみようか？」などの反応

→地域住民の意識や行動の変化のきっかけに！



画像：大東市歴史民俗資料館館報

館の変化

事例：江戸東京博物館

博物館における高齢者と地元学生の交流事業「高齢者げんきプロジェクト」
「体験コーナー」における高齢者が学生に思い出を積極的に語るなど、良好な反応
↓
東京都老人総合研究所と「博物館を用いた回想法」に関する共同研究が立ち上がり、そのために体験コーナーの見直し・改修が行われた

→地域住民の反応をきっかけに新たな事業が生まれ、さらに既存の事業を見直すきっかけに！



画像：江戸東京博物館公式X(Twitter)

地域の変化

事例：だて歴史文化ミュージアム

館立ち上げのための官民共同事業「市民による博物館づくりプロジェクト『ミュゼ』」
地域住民による市内文化財の調査で「指定されている文化財」と「指定されていない文化財」の差を問題意識として共有
↓

市への提言として「収蔵庫」を充実させ資料保存の機能をしっかりと果す博物館を「目指す博物館像」として提示

→地域住民の目と体験をもとに、市と地域住民＝市全体が博物館の重要性・地域における存在意義について認識するきっかけに！



画像：伊達市公式サイト

博士研究のこれから

- ・設定した問いを明らかにするためには、博物館の地域活動の当事者あるいはパートナーとして活動に寄り添って見つめてゆく必要がある
- ・地域アイデンティティは固定ではなく、時代の変化・活動を通じた住民や地域の変化に応じて地域アイデンティティ自体も変化する＝「確立」ではなく「向き合う」あるいは「対話」してゆくもの